

〈調査報告〉

## 教如上人研究班の活動と成果

―教如上人消息一覽の概要―

川 端 泰 幸

### 一、教如上人研究班の活動成果について

大谷大学真宗総合研究所の教如上人研究班では、東本願寺を創立した東本願寺第十二代教如上人（永祿元年（一五五八）慶長十九年（一六一四）、以下、敬称を略し、教如と表記する）に関わる史料の調査と研究に、二〇一四年度から二〇一六年度の三年にわたって取り組んだ。

こうした研究が可能となった背景には、二〇一三年春に真宗本廟（東本願寺）で執り行われた「教如上人四百回忌法要」と、その法要中に阿弥陀堂を会場に開催された「東本願寺創立の上人『教如上人展』」がある。これまでも真宗史はもとより、地域史や政治史研究においても教如の存在に言及されることは多々あったが、「真宗大谷派教学研究所編『教如上人と東本願寺創立―本願寺の東西分派』（東本願寺出版部、二〇〇四年）、上場顕雄『教如上人―その生涯と事績』（東本願寺伝道ブックス）（東本願寺出版部、二〇一二年）、小泉義博『本願寺教如の研究』上・下（法藏館、二〇〇五・二〇〇七年）など」、大桑斉氏の研究（「大桑斉『教如―東本願寺の分立―』（真継伸彦編『浄土真宗』〈宗派別〉日本の仏教4、小学館、一

九八五年)を除いては、その理念や思想、そして彼がめざした教団(東本願寺)とは何であったのかという点にまで踏み込んだ研究はほとんどなかったといえる。しかし、二〇一三年の法要を契機として教如の歩みにあらためて関心が高まったことと同時に、研究書も出されるなど「大桑齊『教如 東本願寺への道』(法藏館、二〇一三年)、同朋大学仏教文化研究所編『教如と東西本願寺』(法藏館、二〇一三年)」、教如研究の新たな視座というものが見えてきたのである。

研究班では、具体的には次に掲げるような法宝物類について、刊行されている史料集や展覧会図録類、寺史などからの情報収集と、所蔵寺院に赴いて現地で調査を行うことの二つの方法でデータベースを蓄積していった。特に収集の対象としたのは、①教如が諸国の僧俗に与えた消息(書状)、②本尊(方便法身尊像)、③宗祖親鸞御影以下、本願寺歴代の御影類、④聖徳太子・七高僧御影、⑤教如自身を描いた寿像(生前の絵像)、⑥真宗聖教の文言を抜き書きして掛幅にしたもの、⑦開板聖教(正信偈・三帖和讃、御文など)、⑧言行を伝える記録や伝記類などである。また、これは研究を進めるなかで、教如との縁によって結ばれた講の存在や、講中での口頭伝承なども重要な研究対象となることが見えてきたのである。

寺院調査については、「二〇一四年度」浄泉寺(中京区)、光徳寺(天津市)、「二〇一五年度」光現寺(長浜市)、春日谷五日講(揖斐川町)、徳満寺(長浜市)、「二〇一六年度」西念寺(山科区)、本誓寺(上越市)、光照寺(山科区)、萬因寺(山科区)、東光寺(下京区)、徳正寺(下京区)、妙蓮寺(福山市)などに赴いて実施した。

以上のような史料を三年間にわたって収集してきたわけであるが、その結果、活動終了時点において前記①～⑦の史料が、ゆうに一、〇〇〇点を超えることが明らかになった。本稿では特に消息をとおして見えてくる特徴や、今後の研究への展開の可能性などについて若干の考察を行いたい。その成果であるデータベースについても掲載したいが、紙幅の都合上、全文を載せることはかなわないため、データベースについては概要を紹介するにとどめ別途他誌において公開することとする(『大谷大学研究年報』七〇集、二〇一八年)。

## 二、教如上人消息一覧の概要

ここでは、教如上人研究班が収集したデータをもとに作成した、教如消息一覧について簡単にその概要をまとめておきたい。後掲する教如上人消息一覧は、教如上人研究班が収集したデータのうち、教如上人が発給した情報の情報を採録したものである。基本的に、発給された年月日、発給、宛所、分類、所蔵者、分類、出典の順番で情報をとった。ちなみに班の作業においては、さらに詳しい情報（西暦や備考など）も収集しているが、紙幅の都合上、今回は最低限の情報のみとした。つまり教如がどのような署名をし、花押をすえて、誰に宛てた手紙であり、その内容はこういったものであるのかという分類と、誰が所蔵しているものであるのか、そしてどの史料集などから採録したものであるのかということがある。

教如上人研究班では、本データベース作成にあたって、いくつかの方針を定めて作業を行った。それは、まず教如の消息を多数集めた①『教如上人御消息集』、②『補遺教如上人御消息集』、③『補遺教如・宣如両上人御消息集』の三つの史料集を基準にすることである。古い史料集であり、翻刻の誤りなども当然のことながらあるが、通し番号がふられており、最近刊行された他の史料集に比べても、最も多くの消息がまとめられているため、そのような方針をとった。なお、分類についても①③の史料集の分類に拠っている。①③では、「石山合戦」（石山合戦にかかわる消息）、「伝道教化」、「志」（懇志に関する消息）、「雑」（それ以外の大名との音信や、上記三点の分類に入らないもの）という四つに分類されており、本データベースでもそれにしたがって中身を判断して分類を付した。

次に、収集作業にあたっては、上記①③の史料集に収録されている史料と重複があったとしても、必ず史料集ごとに登場する教如消息はデータ入力を行った。その過程で、複数の史料集や図書に掲載されている同一の史料間で、翻刻された文字の異同があることもわかってきた。

また本稿のとりまとめ作業の段階までに収集していたのは四三六通であるが、その後、さらに整理を進めていく中で、新たに三六通を追加した。並びの順番は、さまざまに班内で検討を重ねてきたが、年次順で統一することとし、年を欠くものは月日順とした。消息は教如に限らず年を入れないのが通常であり、教如消息も当然のことながら、そのほとんどが年を欠いている。ただし、それによって全く年がわからないものもあれば、内容や閏月の表記から明らかにこの年とわかるものもある。多くの史料集がそうであるように、教如上人研究班でも推定できる年があれば、それを宛てるようにしていたのであるが、一覧になった際、非常に悪いことが見えてきた。また、当然そうであると思われるものがあるが、実は前後一、二年違っているという可能性もある。そのようなことをふまえて、今回は明らかに年があるもののみをまず優先して年月日順に並べ、その次に年がないものを月日順に並べることとした。これによって、結果的には非常にわかりやすく、利便性の高い一覧表ができたと考えている。

〔教如上人消息一覧の一部〕

番号	年月日	差出	宛所	所蔵者	分類	出典
1	天正4年4月11日	釈教如(花押)	西光坊願照	行雲寺(名古屋市)	石山合戦	『教如上人御消息集』001
2	天正4年5月3日	光寿(花押)	大津教信(江)	長寿寺(大津市)	石山合戦	『教如上人御消息集』002
3	天正4年5月13日	教如(花押)	実存(江)	蓮香寺(橋本市)	雑	『補遺教如上人御消息集』204
4	天正6年10月29日	顕如(花押) / 教如(花押)	—	光山寺(萩市)	石山合戦	『教如上人御消息集』003
5	天正8年閏3月7日	教如	—	長安寺(草津市)	石山合戦	『教如上人御消息集』018
6	天正8年5月4日	教如(花押)	加州能美郡山上郷宮 竹村法専坊門徒 / 和 佐谷村外十九ヶ村 / 五日講中	正林寺(能美市)	伝道教化	『一向一揆と加賀門徒』

7	天正8年7月23日	教如(花押)	慈敬寺殿	慈敬寺(高島市)	石山合戦	『教如上人御消息集』042
8	天正8年11月28日	教如(花押)	—	河野西入坊(各務原市)	石山合戦	『教如上人御消息集』052

### 三、教如上人消息一覧の可能性

これらのことによつて、現時点において最も多く教如の消息を網羅した一覧(データベース)が完成した。これをどう活用するかは研究者や読み手にゆだねられることになるが、現時点でいえることは、この一覧から見えてくるのは、決して東本願寺という中世末から近世初頭にかけての転換期に生み出された一つの「教団」の歴史にとどまらないということである。別の表現をするならば、その「教団」とは決して現代的な意味における「宗教的ヴェール」に覆われた一般社会からは距離のある集団ではないということになる。浄土真宗の浸透・展開・影響などについては、もちろん様々な見方があるが、この一覧から見えてくるのは、中世社会を終焉に導き近世という新たな時代を形成せしめた非常に大きな集団(共同体)としての浄土真宗、あるいは本願寺「教団」であるということである。

織田・豊臣・徳川という近世社会を形成していったいわゆる「統一権力」は、何をきっかけとして「近世的」な秩序をめざしていったのであろうか。そうしたまなざしで一覧を見ると、彼らを近世へと向かわしめた原点は、浄土真宗・本願寺・一向一揆という存在にあったといわざるをえないのである。下剋上というアナキーな現状を打破して成立したのが織田・豊臣、そして徳川幕府権力であるとすれば、そうしたアナキーな現状の中で、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康といった、「武」という圧力を民衆の心底にまで浸透させることにより「国家」「国」を創出しようとした、いわゆる「戦国大名」に対して、アンチを提示しえた最大の集団が浄土真宗・本願寺・一向一揆だったのである。

そのことは机上の空論ではなく、例えば徳川家康の伯母(家康の実母である於大の姉で、家康重臣の水野忠政の娘)にあつた

る石川妙春尼に宛てた教如消息などは、「東照大権現」という諸宗教を超越する「神」になろうとまでした家康の伯母への手紙という意味で非常に重要な問題を提起している。若かりし日の家康を最も苦しめた最大の事件が、鉄の結束を誇る三河松平の家臣団であったにもかかわらず、ある一つの出来事をきっかけに世俗の主従制（家康―家臣の関係）を守る者と、そうではなく信仰を選んで家康に刃を向ける者とにわかれて争った三河一向一揆であった。この事件をきっかけとして、家康は長らく三河国において真宗禁制策をとり、三河の僧侶・門徒は故郷を去らなければならなくなったという。ところが、三河を代表する大坊の一つである本證寺（安城市）の有力門徒石川家成の妻となっていた石川妙春尼は、そうした状況にあっても真宗信仰を持ち続け、家康に対してとりなしを願い続け、真宗門徒の三河復帰を実現したのである。

家康は、父亡き後、自身が人質になってからも三河岡崎の松平家を支え続けた家臣団が反旗を翻したということはどう受け止めればよかったのだろうか。この点については今後の研究成果次第であると思うが、本報告の筆者としては浄土真宗とりわけ本願寺教団に対する強烈な警戒心を、家康に植えたものではなからうか。そのようなことも後掲する教如上人消息一覧からは見えてくる。今後、この一覧を活用してさまざまな研究成果が世に問われると思っている。すでに筆者も指摘しているところではあるが、織田・豊臣・徳川の武士団（封建的武士団）は、たんに本願寺・一向一揆と泥沼化する戦闘を繰り返したばかりではないということが明らかになりつつある。織田・豊臣・徳川という「三英傑」に仕える「封建的武士団」であると同時に、阿弥陀如来・善知識のもとに平等であるという相反する信念を抱いた「職能」として武士身分に所属していた人びとの苦悩が後掲教如上人消息一覧からは感じとられるはずである。これからそれら一つひとつが明らかにされていけば、宗教史・真宗史・政治史・経済史など、さまざまな研究領域において、見方の転換をうながされることになると感じている。本稿ではそれらについて言及することはできないが、これからの課題としておきたい。